

1 生命の意味

私がいま生きているとはどういうことか。そして私が死んでゆくとはどういうことか。この問いが、私のすべての思索の根底にある。「生とは何か、死とは何か」を考え抜いていくこと。そして私がこの世で生きる意味、すなわち「生命の意味」とは何かを考え続けていくこと。その思索は、現代文明と科学技術のもとにおいて、私がどのように生きてゆけばいいのかを考えることにつながってゆく。

そのような思索と実践のすべてのプロセス、すべての流れのことを私は「生命学」という名前で呼んでいる。生命学ということばは、拙著『生命学への招待』（勁草書房 一九八八年）においてはじめて導入された。その後、七年を経て、少しずつその具体的な意味内容が固まりつつある。本連載では、私がいま考えている生命学の一部を紹介し、この問題についてさらに思索を進めていくためのステップとしたい。

生命の意味とは何か。そして、いまここで私はどのように生きてゆけばよいのか。それらの問いに答えるためには、まず、生命として生きる私が、この生命世界の中で、どのような形で生きているのかを把握しなければならぬ。

私はこの世界で生命として生きている。それはすなわち、私が何者かから産み落とされ、人々の手によって育まれ、成長し、性行為によって子どもを産み、そしてやがて老いて、最後に死ぬということを意味している。

「私」とは、成長と老衰と死を宿命づけられた主体である。「私」とは、近代科学や近代哲学が想定するような、世界の外部に点として立つ不変の認識主体ではない。そうではなくて、「私」とは、成長や学習や病いや老衰などによって、つねにみずから変容させ続けていくような変容主体なのだ。

私が生命として生きているということは、二つのことを意味している。まず、私自身の生命はある時点で始まって、ある時点で終わるということである。私の生は有限であるということだ。私は、有限の時空を、この世において生き切るしかない。しかし生命には、もうひとつの側面がある。すべての生命は、他の生命から産み落とされる。私の生命は私の両親から生まれた。私の子どもは、私と配偶者から生まれた。こうやって、個々の生命は、生命が他の生命を次々と生み出して自らは消滅してゆくという、「生命の生成と消滅の連鎖」の中に埋め込まれている。（自分の子どもをもたない人も、この連鎖に組み込まれている。）

生命には、このような二つの側面がある。すなわち、一方においては、個々の生命はこの世の有限の時空をしか生きることができない。しかし、他方においては、それは、個々の生死を超えた「生命の生成と消滅の連鎖」の中に、必然的に組み込まれているのである。私は、生命のこのような姿のことを、「いのち」ということばで呼んできた（拙論『The Concept of Inochi, Japan Review No.2 (1991):83-115』）。

私がいまここで生きているということ、それは、このような通時的な生命の生成と消滅の連鎖のただ中において、私という有限な生命がいまここに存在させられたということでもある。

ところで、生命にはさらにもうひとつの姿がある。それは、私という生

命が、いま地球上に存在する様々な生命の網の目にささえられて生きていくという姿である。

私がいまここで生きていけるのは、私の日々の食料となって死んでゆく植物や動物がいるからだ。私が生きていけるのは、植物が光合成によって、酸素を生産してくれるおかげだ。食物連鎖や、異種間の共生関係などによって、私の生命はこの地球上で維持されている。この意味で、私の生命は、地球大に広がった生命の相互依存のネットワークにささえられて、はじめて存在していると言える。

だとすれば、こういうことだ。

いまここで生きている私の生命について考えることは、私の生命を包み込んであるかな過去から現在、そして未来へと続く「生命の生成と消滅の連鎖」について考えることであり、同時に、私の生命をささえとてくれるこの地球上の生命の相互依存のネットワークについて考えることである。それは、そのような通時的・共時的な生命の連なりのただ中において、私という有限な時空を背負った生命が生まれできたことの意味について、考えることである。

生命学とは、このような広がりのもとにおいて、いまここで生きる私とは何かをことんまで考えることであり、私の生き方について考えることであり、そしてその私がよりよき生と死を生きてゆくことである。そして、そのような思索のプロセスとのかかわりにおいて、生命倫理や、エコロジヤ、救いと癒しや、フェミニズムなどについて考えを深め、それらに向かって主体的にかかわっていくことである。

## 2 引き裂かれた本性

私は生命学というアプローチによって、現代における生と死の意味、人間の欲望とテクノロジー、いのちの哲学、自然界における共生と殺戮の意味、将来の科学技術の質的転換の可能性などの問題を追求してゆこうと考えている。その第一歩として、本連載では、生命学のようなアプローチの中から、「人間の生命の本性」という切り口にこだわって、そこから何が見えてくるのかを徹底的に追いつめていきたい。「人間の生命の本性」という窓を通して見えてくる生命の姿を、しっかりと浮かび上がらせたい。先取りしていえば、そこから見えてくるのは、「引き裂かれた生命の姿」である。人間の生命の、引き裂かれた本性の葛藤から、現代の生命倫理やエコロジーの難問は立ち上がってきているのだ。

「人間の生命の本性」の考察に入るための準備として、まず、現代の自然保護と社会福祉の現場に目を転じてみたい。そこで我々はひとつの原理的な難問に直面する。いったい何のために我々は自然保護をするのか、社会福祉をするのかという問題だ。実は、この難問の背後に、「人間の生命の本性」の姿が見えかくれているのである。

では、まず、自然保護の場面から考えてみよう。

現代の産業文明は、自然環境を猛烈に破壊してきた。だから、失われゆく自然を保護してゆかなければ人類に未来はない。こういう言説が、近年のエコロジーブームによって世間に溢れている。

失われゆく自然を保護しなければならないというとき、その背後には、まったく異なる二つの思想が潜んでいる。環境倫理学は、この二つの思想